「実質ゼロ改定」

診療報酬改定の内容と問題点

特定入院料の年齢撤廃でさらに拡がる療養難民

診療報酬（診療行為に対して医療保険から支払われる報酬）は、二年に一度改定されます。二〇一〇年度の改定は、社会保障費二千億円の削減を撤廃し、五回連続マイナス改定を中止したといわれます。これは一定評価されるものの、「医薬品の後発品のある先発品の追加引き下げ」で減らされる六百億円分も含めれば、改定率は＋０・03％（＋百億）の「ゼロ改定」に近い内容です。

これでは「過去のマイナス改定を回復し、病院の診療報酬の大幅な引き上げによる医療費全体の底上げ」という切実な現場の要求からはほど遠く、診療所においては全体としてマイナス改定です。地域医療の崩壊をくいとめるどころか加速しかねない状況です。

また、後期高齢者医療制度で問題とされた特定入院料（入院日数が約九十日を超えると入院料が大幅に下がり、検査・処置も包括化）が全年齢へ拡大されます。長期入院患者が行き場を失い、深刻な療養難民が生まれることが懸念されます。

地域医療の崩壊を防ぐためには診療報酬の大幅引き上げがどうしても必要です。ヨーロッパ先進諸国をみならい、医療費の窓口負担基本ゼロを目指すべきです。いのち（医療）より優先されるお金の使い途なんてそんなにあるのでしょうか。

診療情報課長　松崎　章

障がい者の作業所へ出張歯磨き指導

千秋病院歯科
歯科衛生士　森美佐代

小牧市の「すずかけ作業所」で口腔ケアの学習会をおこないました。

まずは「どうして歯を磨かなくてはいけないの？」「虫歯ってどうやってできるの？」など、ビデオや写真をみて勉強しました。次に「染めだし液」で、どの歯に汚れが残っているのか赤く染めて調べました。

昼食後で口の中には食べ物がベッタリ…みなさん、口の中がまっ赤に染まってびっくり。口の中を手鏡でのぞき、隣の人に染まったところを教えてあげたり、教えられたり…。歯ブラシで汚れ（プラーク）をきれいに取りのぞきました。

歯を磨くということはとても大切です。歯がない人や入れ歯の人も、舌や入れ歯をケアして、自分でできる口腔ケアについて考えましょう。しっかり噛んで豊かな食生活を送りましょう。

染めだした歯を熱心に磨きます

ボランティア交流会

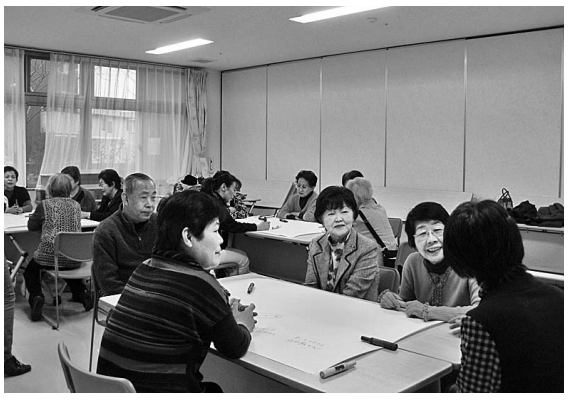
語り合うことでステキな仲間との出会い

岩倉小規模多機能ホーム開所もあり、千秋・江南・岩倉とボランティアさんの活躍の場が広がっています。

三月十三日、初の試み「ボランティア交流会」をおこないました。千秋病院開院以来長年デイケア室でボランティアをしている方、藤が丘、岩倉のディサービスで食事のお手伝いをしている人、イベントボランティアなど様々なみなさんが参加されました。

最初はグループ交流…テーマは「ボランティア活動に大切なもの」。なぜボランティアをしているかの話題になると一気に盛り上がり話が尽きません。「いっぱいおしゃべりができて楽しかった」「ボランティア活動はステキな人とお付き合いができる」との声。

ボランティア委員の木村光子さんは「いろいろなご苦労を経験した人たちが、役に立ちたいと活動されていることがよくわかりました。今後も各事業所での協力をお願いしたい」と謝辞を述べました。



ワールドカフェ方式でホストを中心に話しがはずみます

事業所利用委員会だより

尾張健友会の「事業所利用委員会」では、毎月、患者さん・利用者さんからのご意見やご要望について検討しています。昨年五月から今年一月までに寄せられたご意見は六十四件ありました。うち病院の施設に関わるものが二十一件、職員の対応や接遇、診療システムに関わるものが四十三件でした。四十三件のうち、待ち時間についての苦情が複数寄せられ、特に健診が混みあう時期の診療の流れや職員の対応へご意見が集中しました。健診診察室、新型インフルエンザに対応する診察室の設置や部署での接遇論議など改善を図って来ました。

二〇一〇年度には、友の会の皆さんのご協力を得ながら、二か月に一度の割合で「事業所巡視」を計画しています。引き続き皆様からのご意見やご要望を頂きながら、より一層利用しやすくご満足いただける事業所づくりに努めます。

☆キラ☆キラ☆ちあき☆ 医療の現場から

患者さんの声に耳を傾け 一枚の写真に思いをこめ…

千秋病院A病棟　可知奈美

私が千秋病院に入職し四年が経とうとしています。四年間でたくさんの患者さんに出会いました。なかでも印象に残っている方がKさんです。

Kさんは癌末期の患者さんでした。入院時にはまだお元気でしたが、時間が経つにつれ酸素吸入が必要になったり、寝て過ごす時間が多くなったりと少しずつ状態が悪くなっていきました。

夜勤の終わりがけに病室で声をお掛けすると、「今度、孫が結婚するんです。結婚式に行くのは無理かもしれない。でも、一緒に写真だけは撮りたい。」とおっしゃいます。癌の終末期であり、いつ何時急変してもおかしくない状態ですが、私はなんとかその願いを叶えてさしあげたいと強く思いました。

そこでまずKさんの受け持ち看護師に話しを持ちかけました。彼女を中心にチーム一丸となり、結婚式の前撮りに参加できるよう動き出しました。ご家族にも協力していただき、実現できることになりました。

当日は、Kさんの急変も考え、何が起きても対応できるよう準備しました。私を含め数人が付き添い、撮影に出向きました。Kさんは今までにないくらいに状態が良く、ご家族も驚くほどでした。病院では見ることの出来ない素敵な笑顔を私たちに見せてくださり、「ありがとう」とおっしゃいました。

私たち医療従事者にとって、患者さまの『ありがとう』のひと言がこころにしみます。『これからも頑張っていこう！』という力強い支えの言葉になっています。今後も患者さんの声にしっかり耳を傾け仕事をしていきたいと思います。

中日新聞でも紹介されたパンフ「キラ☆キラ☆ちあき」。職員の仕事に対する思いが伝わってくると好評でした。そこで、一部を再構成してシリーズで紹介します。